

ニッポンのゴミ

第二章 衛生対策とごみ処理

大澤正明

1. ドストエフスキーとチャーホフとコレラ

今、何故か、「カラマーゾフの兄弟」が静かなブームなのだそうです。亀山新訳が光文社文庫から出たのを機に、主に団塊の世代が、「懐かしいなあ、青春時代のあのドストエフスキーを新しい訳で読むことができるのか。どれどれ、どんなに違うのか見てやろうじゃないか」ということなのかどうか、実は、私も、買って、読みました。

ちょっと自慢しますが、青春時代には「カラマーゾフの兄弟」を十回は読んでいます。そして、こちらは自慢ではありませんが、今回、何十年かぶりに読み返してみても、全くと言っていいほどストーリーを覚えていないという悲しい現実も判明しました。

しかし、新しい発見もありました。職業的に見れば、大発見に近い。亀山郁夫訳「カラマーゾフの兄弟1」（光文社文庫）、292ページにこんな箇所があります。

……いや、もうやめる、やめるよ！こんな汚らわしい話はやめにしよう。ハエくそまみれの野っばらから、おれの悲劇に話を移そう、ここもまあ、くそだらけといおうか、下劣まみれの野っばらにちがいないがな

何が「大発見」というかというのと、これが発表された1879年のロシアで、しかもあの大文豪のドストエフスキーが、なんと、「ハエくそ

まみれ」という衛生に深く関係する言葉を罵り言葉として使っていたというのは、これはもう感動以外の何ものでもないと言っていいでしょう。

それにしても、「ハエくそまみれ」という言葉の迫力。イメージとしては、ハエが糞にたかって「くそまみれ」になったという伝染病伝搬形態としては、ごく自然の形が想像されます。

しかし、これは亀山訳だからこそその表現なのかもしれません。岩波文庫がこれだけストレートな表現をしているとは考えにくい。この感動を確固とするためにも他の訳者の表現を知りたいと思いました。

ということで、早速手元にある新潮文庫、それから図書館に行って岩波文庫の訳を比較してみました。

まずは米川正夫訳（岩波文庫）。

いや、いうまい、いうまい、いよいよこれからきたない話をやめて、ハエの糞で汚れたへやから、おれの悲劇へ移ることにしよう。とはいうものの、これもやはりハエの糞でよごれたへやだ。つまり、ありったけの卑劣に満たされた話なのだ。

次は、原卓也訳（新潮文庫）。

いや、黙る、黙るよ！けがれた世界をぬけて、蠅に汚された舞台から、俺の悲劇に移ろう、これだってやはり蠅に汚された、つまりありとあらゆる低俗さに汚れはてた舞台なんだがね。

こう並べて比較すると、それぞれ微妙に意味が違うように見えます。どれが原本に近いのかを見極める知識はありませんが、ハエ自体を汚染源とする米川訳はハエが汚染の伝搬動物であるという点からちょっと違うように思いますし、原訳はハエが汚染の伝搬動物であるという視点はあるように思いますが汚染源が不明です。その点、亀山訳が汚染源もその伝搬動物としてのハエの役割も実に明快です。いずれにしても、この頃のロシアでも糞と糞は不潔を作る存在として不可分の関係にあったこと、クソという言葉はその頃から罵り言葉として確固とした地位¹を確立していたことは確かなようです。

さて、カラマーゾフの兄弟が発表された1879年といえば、わが国においてもコレラ²が大流行した時です。16万人強の患者が出て10万人強の死者が発生しています。コレラの患者数はその後、3つのピークを迎えています。明治19(1886)年には15万人強、明治23(1890)年には4万人強、明治28(1895)年には5万人強の患者が発生しています。

もし明治23(1890)年のコレラの流行がなければ、この年、チャーホフが日本に立ち寄っていたかもしれないということをお話しましょう。1890年4月、チャーホフは胸の病をおして、サハリンに向けてモスクワを出発しました。1万キロにもおよぶ長旅の大半を馬

車で踏破したのだそうです³。7月にサハリンに到着し、3ヶ月滞在した後に南回りの船で帰途につき、その年の12月にモスクワに戻りました。実は、このとき日本にも滞在する予定だったのだそうですが、コレラが流行しているという理由から日本に立ち寄りませんでした。その前年の明治22(1889)年は700人程度しか患者を出していませんから、もし、あと1年早くサハリン旅行をしていたら、チャーホフによる日本見聞録が書かれていたかもしれません。それは、文学上の損失というだけではなく、環境衛生分野から見ても、たいへん残念なことだったのです。というのも、チャーホフがモスクワに戻った半年後の1891年の夏から翌年92年の夏ころまで、モスクワでは飢餓に誘発される形でコレラが蔓延し、37.5万人から40万人の死者を出したと見積もられています⁴。生涯医師であり小説家でもあったチャーホフは、1892年にはコレラの防疫に活躍しました。もし、日本に立ち寄ったチャーホフが医師として小説家として日本のコレラの惨劇を目にしてロシアのそれと比較評価していたら、環境衛生対策上の貴重な資料を残すことができたと思うのです。

さて、わが国におけるコレラは、文政5(1822)年に西日本を中心に流行したのが最初とされています。江戸など全国に広まったのは、その36年後の安政5(1858)年のことで、日米修好通商条約が結ばれた年です⁵。コレラの流行は、その後1900年代初期まで深刻な被害を与え続け、前述したように明治12(1879)年には、ついに死者が十万人を超えています⁶。

¹ 罵り語としての「クソ」という言葉には圧倒的な迫力があります。「クソッ!」という感嘆詞は言うまでもなく、「クソのような奴」というのは人格を全否定するようなインパクトがあります。その点、「ゴミ」はちょっと格が落ちるような印象があります。「ゴミのような奴」は無視していい奴というようなことでしょうかから全否定というほどではありません。もっとも、無視されるくらいなら全否定される方がマシという考えもあっていいのでしょうか。

² コレラは、「片仮名でコレラとあるが面白くない。一見ゾットするほど恐ろしがるのがよい……」(生活と環境、Vol.13、No.10、p35)ということで、「虎烈刺」と表記されることが多かったようである。

³ 浦雅春：チャーホフ、岩波新書、pp111-116(2004)

⁴ 左近幸村：ゼムストヴォ医師としてのアントン・チャーホフ、Public History、Vol.1、pp113-129(2004)

⁵ 日本の歴史 近世から近代へ⑨コレラ騒動、週刊朝日百科 89(2004)

コレラ対策としては、当初は警官による消毒と隔離という防疫に頼っていましたが⁶、次第に衛生対策へ移っていきました。明治23(1890)年の水道条例に始まり、明治33(1900)年には下水道条例と、ごみやし尿の処理について定められた汚物掃除法が制定されました。「コレラは衛生の母」と言われる所以です。

なお、岩倉遣欧使節団の一員としてドイツやオランダの医療制度を視察した長与専齋は明治8(1875)年に内務省に衛生局を設置していますが、「衛生」という言葉は、ドイツ語のHygieneの訳語として長与が採用したもので、「生命を衛る」という意味だそうです⁸。

さて、このコレラの流行は、明治29(1896)年以降ほぼ終息に向かい、それ以降、公衆衛生問題としての感染症は、腸チフス、さらに赤痢に移っていくことになります。

2. ネズミとハエとごみ

庭に小さな池を作り、金魚を飼うというのが庶民のささやかな贅沢だった、という時代がありました。

たしか昭和35(1960)年頃のことだったと思います、父は庭に直径1メートル、深さも1メートルほどの穴を掘り、セメントで塗り固め、1週間ほど放置してから水を張りました。

近所の沼から水草を抜いてきて、底が隠れるほど浮かべると、ちょっとした豪邸の庭のミニチュア版に見えました。しかし、金魚は1週間も生きながらえることはありませんでした。セメントが水に馴染む期間が不足していたのだろうか、水を張る時間を延ばしてみましたが、やはりだめでした。それを何回か繰り返すうちに、金魚を飼うという意欲は次第に失せていき、いつの間にか池は巨大な水たまりに変わり、さらに時間が経つと、別のすこぶる現実的な用途として使われるようになりました。

その頃、わが家の屋根裏や押入の中、いろいろな所をネズミが走り回っていました。夜になるとガサゴソと不気味な音があちこちから聞こえ、それが頻繁になったころ、母は脂身の餌を付けた金網のネズミ取り機を仕掛けます。朝方、餌に釣られたネズミがまんまと罠にかかっていると、母はこともなげに金網をぶら下げて、すでに金魚のための住処としての機能を失った池に沈めます。そして30分ほど過ぎた頃引き上げて、道路を挟んだ岸壁から海岸に捨てます。海岸はわが家のごみ捨て場でした。そんな光景が今でも記憶に残っていますから、日常的ではあっても衝撃的な出来事だったのでしょう。

十数年前に住んでいたインドネシアでは、地方から出稼ぎに来ていた10代半ばの少女がお手伝いさんとしてわが家に住み込んでいました。夕食も終わり、彼女の片づけの仕事も終わると、みんな時間をもてあまします。そんな時は家の前の地べたに腰を下ろして、彼女の田舎の話など聞きながら、とりとめもない時間を過ごしたものです。ある時、彼女の座っているすぐそばに小さなネズミがいるのが見えました。生まれたばかりでまだ警戒心がないのか、彼女と私の間でチョロチョロと遊んでいる感じでした。

⁶ この頃、虎烈刺送りという騒動が各地で起こったという。患者がでると、広がらぬうちに隣村へ送ってしまえというわけで、お寺の経櫃や獅子頭をかつぎだして、「コレラを送れ、隣村へ送れ、オークレ、オークレ」と囃し立て、送られる方では、これに對抗、石の投げ合いから鋤鍬の叩き合い、巡査もまきこんでの大乱闘……というようなことが全国であったという。(生活と環境、Vol.13、No.10、p35)

⁷ コレラ患者が出ると、患者を避病院(ひびょういん)へ送ったという。病院とはいっても治療を施す余地はなく、感染者を隔離するだけの施設という状況であった。避病院送りの患者は、黄色の小旗を立てた戸板でかつがれた。ちなみに、赤痢は赤旗を立て、赤紙を家に張ったという。(生活と環境、Vol.13、No.11、p35)

⁸ 小野芳郎：〈清潔〉の近代、講談社選書メチエ(1996)



家の近くのお手伝いさん。彼らは地べたに腰を下ろし話し込むのが好きだった

私は、思わず悲鳴をあげて飛び退いてしまいました。赤痢が！チフスが！ペストが！そんな言葉が頭を駆けめぐり、彼女にも早く逃げた方がいいと手招きしたのですが、彼女はそんな私を不思議そうに眺めると、ネズミを掴みあげ、ポイと近くの草むらに放り投げました。ネズミをさわった手を洗うわけでもなく、「ネズミがそんなに怖いのか」と笑いながら、私を見上げます。

そのネズミの住処は分かっていました。インドネシアの家は、日本の木造家屋とは違って全面コンクリート製ですから、ネズミにとって住みにくい構造になっています。彼らの住処は家の前に備え付けられているごみ箱です。わが家から出たごみは、そのコンクリート製のごみ箱に入れられ、その中の資源になるものは不定期にやってくる回収人に集められ、残った厨芥や雑介は何日かに1回、地域で雇った収集人が集めに来ます。コンクリートのごみ箱の前面は、ごみをかき出しやすいように溝が開いていますから、ネズミは出入り自由ですし、おまけにごみ箱のすぐ側には排水用の溝が掘られています。ごみ箱の上部は開放されています。ハエの発生を防止するためには蓋をした方がいいのではないかと、当時のカウンターパートに言うと、「鉄製の蓋をしたら、一夜で盗まれてしまうと笑われてしまいました。

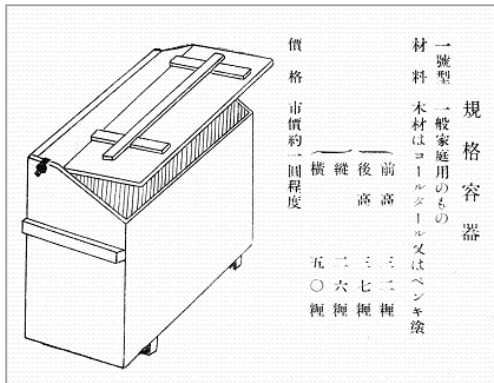


インドネシアのごみ箱

さて、わが国のごみ貯留排出方法はどのように推移してきたのでしょうか。

明治 33(1900)年に制定された汚物掃除法では、蓋のある容器に排出することとされていましたが、昭和 5(1930)年の同法の改正では、厨芥用と雑介用の二種類に区別することが認められました。この方式はその後も続き、昭和 29(1954)年に制定された清掃法においても、食物の残廃物とその他のごみに分けることとされました。具体的には、家の前に設置されたごみ箱に雑介を排出し、厨芥類は別途バケツなどに入れて、収集者に引き渡されたようです。雑介の収集は、収集者がごみ箱から手作業で掻きだし、その後手車や馬車によって埋め立てする場所まで運ばれました。

ごみ箱への排出が行われなくなったのは、昭和 33(1958)年に、東京オリンピックの開催が決定されて以降のことであり、昭和 39(1964)年の東京オリンピック開催までの間に徐々にごみ箱の撤去が進められました。ごみ箱が撤去された後は、ポリバケツによる混合収集が一般化しました。ポリバケツによる収集で居住環境の衛生状態は大きく前進しました。ハエやネズミの進入を防ぐことができたからです。その後、プラスチック袋や紙袋による袋収集に移行し、平成に入ってから、ごみの減量を主目的にした指定袋による収集が一般化することになります。



大阪市のごみ容器規格

このようなごみの貯留排出方式がハエやネズミなど伝染病の媒体動物の減少に大きく貢献したことは間違いありませんが、このほかにごみの輸送が人力や馬車から自動車に変わり、いま私たちが見るようなパッカー車になったことも大きく貢献していますし、生ごみを直接埋め立るという処理方式から焼却という衛生対策にとって強力な武器が普及されたことも貢献していることは言うまでもありません。

そして、昭和 50(1975)年頃を境にして、赤痢やチフスという、主に飲料水や食品などに付着した病原菌を摂取することによって伝染する経口伝染病は一定の解決を見ることがになります。

ところで、「一定の解決を見る」というのは微妙な言い方です。何故、このような表現になったかという、「では公衆衛生の向上を目的とするごみ処理はすでに終わったのか、あるいは終わっていいのか」という疑問が付いてまわるからです。平成 23 年 3 月 11 日に起った東北大震災でも災害廃棄物による衛生問題が大きくクローズアップされたところですが、今後もこのような問題が「面」としてではなく「点」として発生することが想定されます。

3. GHQ とリープマンと……多くの先達

GHQ⁹がわが国の衛生対策に大きな役割を果たしたことは、よく知られています。「日本人は、戦争中に外国の医学研究から切り離されていたため、死と病気に対する新しく効果的な治療法の数々について知識を持ち合わせていなかった」と現状評価したうえで、「害虫の駆除や公衆衛生に影響を及ぼすと思われる疾患への対策を実施すること」など公衆衛生の改善を目的とした多くの指示を出しました¹⁰。かなり上から目線の指示ではありますが、占領軍ですから、そんなものかもしれません。ちょっと気分はよくありませんが、「コレラが衛生の母」とすれば、「GHQ は衛生の父」とでも言えるでしょうか。

昭和 24(1949)年に 34 才の若さで川崎市の初代課長に就任した工藤庄八氏は、その著書¹¹の中で「駐留軍は清掃行政というものは片手間にやっているは駄目だとして、いい加減な仕事をしている自治体に対しては処罰をしかねない強硬な態度でありました。」と述べ、バキュームカーの開発に着手した経緯を記しています。

戦後の保健所の充実に意欲を燃やしていた元厚生省公衆衛生部長の楠本正康氏は、GHQ と折衝を重ねた末に GHQ から日本政府宛に「保健所の整備拡充に関するメモランダム」を交付させることができるまでの様子をその著作¹²に残しています。これなどは、GHQ の圧倒的な影響力を巧みに利用して日本政府を動かした例と言えるかもしれません。

東京都がごみ箱を撤去するきっかけとなっ

⁹ GHQ:正式には GHQ/SCAP (General Headquarters, the Supreme Commander for the Allied Powers)、連合国総司令部。昭和 20(1945)年に米政府が対日占領政策を実施するために東京に設置した。昭和 27(1952)年に講和条約が発効するまで続いた。

¹⁰ GHQ 日本占領史 22、日本図書センター

¹¹ 工藤庄八、私の清掃史(1987)

¹² 楠本正康、資源は地球をめぐる一よりよい環境をめざして、ドメス出版(1983)。GHQ は伝染病や性病対策には熱心だったが、保健所には関心を持っていなかったという。

たのはニューヨーク市清掃局次長のリーブマンの指摘がきっかけだといわれています¹³。リーブマンは昭和 35(1960)年 10 月、東京に 10 日あまり滞在し、収集・運搬・処理・処分 のすべてを視察し、多くの提言を行ないました。その中で、ごみ箱をやめて蓋付きの容器による混合収集が望ましく、作業員がごみを手で集める労働をなくするべきであるとの指摘を行っています。しかし、ごみ箱については、以前から「収集作業が非効率であること」「交通の支障になること」「都市の美観上好ましくないこと」「ハエやネズミの温床になること」「放火が頻繁におこっていること」などから問題になっていたようで、すでにリーブマンが来日する以前の同年 8 月には杉並区で他の容器に移行するモデル試験が始まっていました。どうやら、都清掃局の意向としては、都庁内にあった異論を説得し、予算獲得の手段としてリーブマン提言を利用したという面もあるようです¹⁴。なるほど、そう思って、リーブマン氏の写真を見ると恰幅よく、左手をポケットに突っ込んで話し込む姿は、偉そうでもあり、まあ、貫禄があるのです。こんな人に言われたら、「はい」と頷いてしまいそうですが、それを利用して政策を通していったというのはさすがに高度経済成長期の日本人はしたたかです。



リーブマンの視察

¹³ 東京都清掃事業百年史、pp152-153、2000

¹⁴ 日本の 3R 制度・技術・経験の変遷に関する研究、pp57-59、(2010)

こういう微妙な話を当事者はどう言っているのでしょうか。昭和 34(1959)年から昭和 37(1962)年まで東京都清掃局作業部長をしていた横田政次氏はその著書¹⁵の中で当時のことを次のように回想しています。

「ごみを入れる、あのふたつきのポリバケツ。僕たちが考えたんだ。当時はまだ一軒ごとに木やコンクリートのごみ箱があった。収集作業員はごみ箱の下の取り出し口を開け、ザルでごみをかき出していた。ごみ箱の数は、二十三区内だけで百八十五万個あった。ニューヨークから招いた清掃局の幹部も、作業員がしゃがんでごみをかきだすなんて、人道上よろしくないって言う。ニューヨークはドラム缶大の鉄の容器で収集するというが、日本人には重すぎる。軽くて、量が入るものをと、企業に頼んで作ってもらったのが、ポリバケツだった。ふたを押さえてぐるっと回して開け閉めする方法も考案したよ」

札幌市の場合は、共同ごみ箱という独自のシステムをとっていましたが、このシステムは市民の公德心と協力を期待して進められたものです。やはりというべきか、もちろん、このシステムはうまくいきませんでした。ごみ箱がいっぱいになれば、その横の地面にも捨てるということになり、共同ごみ箱の一带はネズミの格好の住処になってしまいました。及川藤男の著書¹⁶によると、

「ひとつのごみ箱から多いときは二百匹ものネズミがとれた。ごみ箱をひっくり返すと、ネズミは一斉に頭を突っこみ、まるでそろばん玉が並んでいるようだった。みんなで小遣いを出しあいネズミ供養をしたのは三十五年ごろのことだった」

¹⁵ 横田政次：僕は裏方一都・区政四十五年、ぎょうせい、pp43-44(1992)

¹⁶ 及川藤男：北の清掃屋 雑録、「北の清掃屋 雑録」刊行会、(1981)

想像するだけで、すさまじい状態だったようですが、昭和 37(1962)年にはこれを一挙に改善するべく 20 リットル石油缶等を単位とする従量制へ移行しました。この方式を実現するまでに 500 回近い地区説明会を開くなど大変な苦勞を強いられたそうです。

そして、その後このポリバケツや石油缶から袋収集に移行したわけですが、袋収集を初めて導入したのはどこかというところ、おそらく浜松市です。浜松市の場合、ポリ容器の時代を経ずに、いきなり袋収集に移行しました。収集方法改善テストを経て昭和 40(1965)年 6 月から紙袋収集を開始しました¹⁷。この方式の採用によって、従来のごみ箱収集では一日に 350 世帯しか回収できなかったものが、1200 世帯の回収が可能になったそう¹⁸です。個人負担が増えたため、反対が多かったそうですが、昭和 41(1966)年 2 月から全域袋収集に踏み切っています。この方式、ごみという雑多な物質を処理する清掃業から、袋という荷物を移送する運送業に変えたという点で大きな発想の転換があるわけで、その観点からたいへん大きな出来事といってもいいと思います。このシステムを提案したのは、浜松市内の楽器メーカー、河合楽器製作所だったそうです¹⁹から、なんだか、ちょっと嬉しくなるではありませんか。

ともあれ、このような地味な努力の数々によって、わが国の公衆衛生は大きく前進してきたのです。



ごみ袋は 15 円/袋～
20 円/袋、袋を置く
ための台は 600 円で
市販された。

市販されたごみ袋²⁰



袋ごみ収集風景²¹

¹⁷ 浜松市清掃部：清掃事業概要 昭和 46 年版

¹⁸ 静岡新聞、昭和 40 年 7 月 1 日

¹⁹ 都市と廃棄物、Vol.24、No.3、p56、1994

²⁰ 市報はまつ、昭和 40 年 6 月 2 日

²¹ 市報はまつ、昭和 40 年 8 月 5 日